九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戦後ベストセラー小説に見る子ども観の変容とその社会背景

中田, 周作
九州大学大学院 : 博士後期課程3年

https://doi.org/10.15017/1011

出版情報：飛梅論集. 1, pp.21-36, 2001-07-25. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学大学院教育学コース院生論文集，2001，創刊号，21－36頁
Bull Education Cource, kyushu U , 2001, Vol.1, pp21－36

戦後ベストセラー小説に見る子ども観の変容(1)とその社会背景

中　田　周　作*

1. はじめに

本研究は子ども観の実証的研究であり、その目的は戦後の日本社会において、子ども観がどのように変容したのかを明らかにし、子ども観の変容を引き起こした社会背景との関連を探ることにある。ここでいう子ども観とは、当該に社会における子どもを認識するための枠組みとして社会に共有されている子どもについての平均的なイメージのことである。

従来、子ども観研究もしくは児童観研究といえば、主に、哲学的・思想的アプローチ(2)や、歴史的アプローチ(3)により、主要な先行研究が蓄積されており、社会学的アプローチによる研究は少ない。これは子ども観研究にとって、社会学的アプローチが適していないのではなく、日本の教育社会学が子ども観研究を価値研究と見なし、経験科学の研究課題に相応しくないという理由で敬遠したからと考えられる(4)。

とはいうものの、いずれのアプローチで明らかにされた子ども観も、大人たちや社会が子どもたちに対する態度を決定する準拠枠を提供するものである。こうした一定の行動様式の指針となる子ども観は、十分に社会学的研究のテーマに相応しいものである。山村（1970，25頁）は、こうした子ども観を「『社会的事実』としての子ども観」と呼び、「思想としての子ども」観とは区別している。また、徳岡（1984，1993）、Yamamura（1986）、林（1995）らの研究は、社会学的アプローチによる子ども観研究といえる。

こうした実証的子ども観の研究成果が蓄積されると、規範として想定される子ども観と現在の子どもの実態との齟齬によって生じる子ども問題や、複数の子ども観が支持されているために日常生活の場面で潜在的に葛藤を引き起こしている教育問題等の解明に寄与できる。

以上のような子ども観の定義、先行研究の展開、実証的な子ども観研究の意義を踏まえ、本研究では子ども観がどのように変容したかについて、戦後のベストセラー小説の分析を通して明らかにする。データとしてのベストセラー小説の特徴については次章で詳細に述べるが、出版当時の社会状況を小説の背景に取り込んでいるものを選択する。そして、小説に描かれている子どもを、子ども観の種類と小説のなかの分析対象場面における登場人物の感情という2つの視点より抽出する。子ども観の種類では、どういった子ども観が社会に存在しているのかを明らかにする。感情につい

*九州大学大学院博士後期課程３年

ては、子ども観の否定や葛藤に伴う登場人物の不安定な状況を手掛かりにして、その子ども観が一体どのように見なされているのかを分析する。そして明らかになった子ども観を、ある程度一般化する。これらの方法については第3章で述べる。次に、その変容した子ども観は、どういった社会背景により引き起こされたものなのかを、過去の統計資料等を用い、第4章で関連を検討する。最後の第5章では、戦後の日本社会における子ども観変容の実態を提示する。

なお、分析対象の期間を戦後としたのは、子どもの実態が大きく変化した[5]といわれる1960-70年代の前後と、そこから現在に至るまでの期間の子ども観を明らかにするためである。このいわゆる高度成長期前後の急激な社会変動は、機能主義的な意味での規範、つまり社会システムを維持するためのサンクションを通して同調を求められる行為の準拠枠としての子ども観を大きく変容させたことが推測[6]される。しかし、その時期から現在に至る子どもの実態の変容についての先行研究は多く蓄積されているが、子どもを認識するための枠組みとしての子ども観の変容についての研究は未だ僅少である。

2. 分析対象

本研究では、まず、戦後の日本社会が共有している子ども観を明らかにする。こうしたイメージを捉えるための社会学的なアプローチとしては、次の3つの方法が考えられる。第1は、そのイメージを前提として作られている法・道徳・組織などの狭義の制度を分析する方法。第2は、習慣や服装などイメージに基づく行為を分析する方法。第3は、言説や芸術などのなかで作り出される集合表象を分析する方法である[7]。つまり、イメージそのものは直接に把握できないので、捉えようとするイメージが反映されている指標を見つけ出す必要がある。そこで本研究は第3の方法に該当するベストセラー小説を分析する方法を採用する。こうした本研究が課題とする子ども観は、文化によって規定されている。したがって、戦後期における日本社会の文化を反映している指標が選択されなければならない。ベストセラー小説は、これらの条件を満たしていると考えられる。

指標としてのベストセラー小説には以下の特徴がある。まず第1に、子ども観について戦後50年間の推移を検討するものであるから、当時の社会背景や考え方を反映している必要がある。ベストセラー小説は、社会のなかで幅広く支持されているため、この条件を十分に満たしていると考えられる。第2は、ベストセラー小説は社会のなかで幅広く支持されているので、日本の社会が子どもについて所持している平均的なイメージをとらえることができる。第3は、実態調査では得難いデータが入手できることである。これは、文化的に内在するが一般の調査ではとらえることが難しいプライバシーに関わるような問題を含む場面をも捉えることができることと、典型的な場面より凝集された子ども観を抽出できるということである[8]。また、データがすでに文字化されていることも扱い易さという意味では利点である。

分析対象とした小説の具体的な選出にあたり、まず本研究のいう戦後を1946年から1999年までとした。そして、選出基準には、『出版年鑑』（2000）を用いた。選出過程は、はじめに、内容が

当時の世相を反映し[9]、単年の売り上げ順位[10]が1位の小説をピックアップしていった。次に、戦後期全体の推移を分析するため、各小説のベストセラー年で間隔が開きすぎているところに売り上げ順位の高い小説を加えた[11]。これらの過程を経て以下の計16編の小説が選出された。

太宰 治	1947	『斜陽』	新潮社
菊田 一夫	1953	『君の名は (3)』	宝文館出版社
石原 慎太郎	1956	『太陽の季節』	新潮社
原田 康子	1956	『挽歌』	東都書房
松本 清張	1961	『砂の器』	光文社
三浦 綾子	1965	『氷点』	朝日新聞社
庄司 薫	1969	『赤頭巾ちゃん気をつけて』	中央公論社
有吉 佐和子	1972	『恍惚の人』	新潮社
村上 龍	1976	『限りなく透明に近いブルー』	講談社
五木 寛之	1979	『四季・奈津子（上・下)』	集英社
渡辺 淳一	1984	『愛のごとく（上・下)』	新潮社
渡辺 淳一	1986	『化身（上・下)』	集英社
村上 春樹	1987	『ノルウェイの森（上・下)』	講談社
吉本 ばなな	1989	『TUGUMI』	中央公論社
瀬名 秀明	1995	『パラサイト・イヴ』	角川書店
渡辺 淳一	1997	『失楽園（上・下)』	講談社[12]

3. 小説分析

ここでは選出した16編の各小説より、どのように子ども観を抽出していくのかを説明していく。子ども観の抽出にあたっては、子ども観の種類と小説のなかの分析対象場面における登場人物の感情との2つの視点より分析を進めていく。

まずはじめに子ども観の種類についてであるが、小説のなかで子どもを指し示す言葉・文章が出てくる場面を選び出し、そのなかで子どもは一体どのように見られているのかを、登場人物の考え方や小説のストーリー展開のなかより抽出していった[13]。このとき、青年期の登場人物についても、登場人物の考え方や小説のストーリー展開のなかで子どもと見なされていれば分析対象の場面とした。一方、子ども期・青年期に該当しない登場人物が親子関係にもとづく子どもと見なされている場面は除外した。また、厳密な区別はできないが、子どもを指し示す言葉を用いた、比喩表現や情景の記述も分析対象の場面より除外した[14]。

次に、小説のなかの分析対象場面における登場人物の感情についてであるが、子ども観の否定や

葛藤に伴う登場人物の不安定な状況を手掛かりにして、その子ども観が一体どのように見なされているのかを分析する。つまり、一般的に教育問題として取りざたされる子ども観というのは、社会に安定的に存在する子ども観ではなく、我々に不安定な感情を抱かせつつ社会に存在している子ども観である。したがって、各場面ごとで社会に安定的に存在する子ども観と、我々に不安定な感情を抱かせつつ存在している子ども観に分けて分析を進めた。このとき、ある子ども観を肯定し、なおかつ登場人物の感情など、場面の状態が安定している場合を「安定的な場面」と呼び、表2に◎で表した。一方、ある子ども観を肯定的にとらえることができない場合や、複数の子ども観を同時に肯定しているために、登場人物や場面の状態が葛藤や意見の対立を引き起こしている場合などは、「ゆらぎの場面」と呼び、同様に△で表した。これらの関係をまとめると表1のようになる。

場面の状態（表１）

場面の状態／子ども観	肯定された子ども観	肯定されない子ども観
安定した状態	安定的な場面	ゆらぎの場面
不安定な状態	ゆらぎの場面	ゆらぎの場面

こうしてみると、安定的な場面から抽出された子ども観は、社会に安定的に存在している子ども観であると見なすことができる。そして、ゆらぎの場面から抽出された子ども観は、我々に不安定な感情を抱かせつつ存在している子ども観であるということになる。着目すべきは後者であり、子ども観そのものが否定されなくても、我々に不安定な感情を抱かせることになるのである。また、該当する子ども観が、社会のなかに存在するから抽出されたのであり、否定されたり、不安定であることと、そのような子ども観が存在しないというのは異なるものである。

このようにして各場面から読みとられた子ども観は、結果的に「愛情表現の対象としての子ども」「形成期としての子ども」「無垢な存在としての子ども」「無能な行為者としての子ども」「躾の対象としての子ども」「親の属性を受け継ぐ対象としての子ども」「学歴社会のなかの子ども」「性的対象としての子ども」「学生としての子ども」「有能な行為者としての子ども」「権利の主体としての子ども」という11種類の子ども観にまとめることができた。これら全てをまとめたものが表2[15]である。これをもとに、抽出された11種類の子ども観を見ていくとそれぞれ次のようになる。

愛情表現の対象としての子ども：この子ども観は、13編の小説からと最も多く抽出された。このため、戦後期の分布は密である。したがって、この子ども観は戦後期を通して維持されていることがわかる。しかし同時に、8編の小説からゆらぎの場面での抽出を見ることができた。特に1980年代以降は、この傾向が顕著である。ゆえに、愛情表現の対象としての子ども観は、最も強く維持されている子ども観である一方、否定や葛藤などを伴う不安定さも多く内包している子ども観であるといえる。

形成期としての子ども：この子ども観は、11編の小説から抽出された。分布も比較的均等であ

るため、戦後一貫して維持されてきた子ども観であるといえる。しかし、1960年代半ば以降の小説からはゆらぎの場面のみからも抽出されている。したがって、不安定さをはらみつつも、維持されている子ども観であるといえる。

無垢な存在としての子ども：この子ども観は、10編の小説から抽出された。分布は比較的均等である。したがって、この子ども観も戦後期を通して維持されていることがわかる。この子ども観の特徴は、安定的な場面から抽出された数が最も多く、ゆらぎの場面からは、あまり抽出されていないことである。ゆえに、安定して維持されてきた子ども観であるといえる。

無能な行為者としての子ども：この子ども観は、7編の小説から抽出された。その多くは、1980年代半ば以前のものである。したがって、1980年代半ば以後は、その存在が薄れつつある様子がうかがえる。

躾の対象としての子ども：この子ども観は、5編の小説から抽出された。その全てが、1960年代半ばから1980年代半ばである。1960年代半ばより前と1980年代半ばより後からは抽出されなかった。

親の属性を受け継ぐ対象としての子ども：この子ども観は、5編の小説から抽出された。ところが、1950年代半ば以前からは肯定する場面からのみの抽出となったが、残りの2編、1960年代と1980年代の小説からは、ゆらぎの場面からも抽出された。また、その時期からの抽出が少ないことを考えると、失われてはいないものの薄れつつあることを感じさせる傾向が読みとれる。

学歴社会のなかの子ども：この子ども観は、5編の小説から抽出された。そのうちの3編は、ゆらぎの場面からであった。したがって、あまり安定的な状態にはないことがうかがわれる。また、1960年代半ば以前からは抽出されなかった。

性的対象としての子ども：この子ども観は、4編の小説から抽出された。うち2編は、ゆらぎの場面からである。このうち、早い時期の2編からは、ゆらぎの場面からで、後の時期の2編からは安定的な場面から抽出された。このことから、次第に受け入れられつつある子ども観であることがわかる。

学生としての子ども：この子ども観は、1970年代以前の2編の小説から抽出された。抽出数が少ないため、存在感の薄い子ども観といえる。しかし、場面は両方とも安定的な場面からであった。

有能な行為者としての子ども：この子ども観は、3編の小説から抽出された。いずれも、1960年代以降の安定的な場面からである。抽出された数は少ないが、安定的に存在しているため、広がる可能性のある子ども観であるといえる。

権利の主体としての子ども：この子ども観は、1編の小説から抽出された。この子ども観は、抽出された数が最も少なく、その後の小説からも抽出されなかったので、この子ども観は社会に広く受け入れられているものではないといえる。

抽出された11種類の子ども観は、大人と子どもの関係における子ども特有の立場をどのように規定しているか、という視点から次の3つのカテゴリーに分けることができる。

分析結果一覧表（表２）

『小説名』ベストセラー年／子ども観	愛情表現の対象としての子ども	形成期としての子ども	無垢な存在としての子ども	無能な行為者としての子ども	躾の対象としての子ども	親の属性を受け継ぐ対象としての子ども	学歴社会のなかの子ども	性的対象としての子ども	学生としての子ども	有能な行為者としての子ども	権利の主体としての子ども	順位	間隔
『斜陽』1948年	◎	◎		◎		◎						1	2
『君の名は(3)』1953年	◎ △	◎	◎			◎						3	5
『太陽の季節』1956年	△		◎			◎			◎			1	3
『挽歌』1957年	◎		◎	◎								1	1
『砂の器』1961年	◎	◎										6	4
『氷点』1966年	◎ △	△	◎ △	◎	◎ △	◎ △	△	△			◎ △	1	5
『赤頭巾ちゃん気をつけて』1969年					◎		◎ △			◎		3	3
『恍惚の人』1972年		◎	◎	◎ △	◎ △		◎		◎			1	3
『限りなく透明に近いブルー』1976年			◎									2	4
『四季・奈津子』1979年	◎	◎	◎	◎								3	3
『愛のごとく』1984年	◎ △	△		△	◎							1	5
『化身』1986年	△	◎	◎ △		◎			△		◎		1	2
『ノルウェイの森』1988年	◎ △	△	◎				◎	◎				1	2
『TUGUMI』1989年	△	◎				◎ △				◎		1	1
『パラサイト・イブ』1995年	◎ △		◎				△					5	6
『失楽園』1997年	◎	◎		◎				◎				1	2
小計	10／8	8／3	10／2	6／2	5／2	5／2	3／3	2／2	2／0	3／0	1／1	—	—
合計	13	11	10	7	5	5	5	4	2	3	1	—	—

注）

1．◎は該当する子ども観が「安定的な場面」から抽出されたものである。
2．△は該当する子ども観が「ゆらぎの場面」から抽出されたものである。
3．順位は、該当年の売り上げ順位である。
4．間隔は、各小説のベストセラー年の間隔である。
5．小計の両数字は、左側が◎、右側が△の合計数である。
6．合計は、該当する子ども観を抽出できた小説数である。

1つめのカテゴリーに属するのは「愛情表現の対象としての子ども」「形成期としての子ども」「無垢な存在としての子ども」「無能な行為者としての子ども」「躾の対象としての子ども」「親の属性を受け継ぐ対象としての子ども」の6つである。これらの子ども観は、子どもを未熟さ、もしくは、その未熟さから派生される要因にもとづいて子どもを認識しているので「未熟な存在としての子ども」観といえる。そして、このカテゴリーの子ども観には、大人と子どもの差異に明確な序列が存在している。

2つめのカテゴリーに属するのは「学歴社会のなかの子ども」「性的対象としての子ども」「学生としての子ども」の3つである。これらの子ども観は、大人と子どもの関係を相対化することにより生じた子ども観であるため「相対化された子ども」観といえる。

3つめのカテゴリーに属するのは「有能な行為者としての子ども」「権利の主体としての子ども」の2つである。これらの子ども観は、子どもを主体性を持つ存在として見ているため「主体的存在としての子ども」観といえる。

また、場面の状態ごとでは、抽出された11種類の子ども観のうち9種の子ども観が、ゆらぎの場面から抽出された。

ここまでの小説分析により、戦後の日本社会における子ども観として、11種類の子ども観が明らかになった。これらの子ども観を個々に見た場合は、先述のとおりであるが、これらを大人と子どもの関係で3つのカテゴリーにまとめた場合、戦後の日本社会における子ども観の動向として、種類の側面から次の2点を提示できる。①戦後一貫して、「未熟な存在としての子ども」観が維持されている。②「相対化された子ども」観や「主体的存在としての子ども」観は、抽出量、種類ともに少ない。しかし、①の子ども観とは明らかに異なるカテゴリーを形成している。②の2つの子ども観は、ほぼ1960年代半ば以降から抽出されている点も共通している。

次に、場面の状態という視点からは、③多くの子ども観が、ゆらぎの場面から抽出された。ゆらぎの場面から抽出された子ども観は、我々に不安定な感情を抱かせることになる。こうしてみると、どういった子ども観であれ、その認識の過程において、我々に不安定な感情を抱かせる構造を内包していることが指摘できる。

したがって、戦後の日本社会における子ども観を把握するためには、異なる3つのカテゴリーに属する子ども観が緩やかに累積している状況と、全ての子ども観が我々に不安定な感情を抱かせる要素を内包している可能性とを意識することが必要である。

4. 子ども観変容の社会背景

前章までの小説分析で、戦後の日本社会における子ども観として、11種類の子ども観が明らかになり、それらを3つのカテゴリーにまとめることができた。本章では、過去に実施された統計データ等を検討することにより、前章までで明らかになった3つのカテゴリーにまとめられたそれぞれの子ども観および戦後の日本社会における子ども観変容の全体と、その社会背景の関連を探って

いくことを目的とする。

(1)「未熟な存在としての子ども」観とその社会背景

前章までで明らかになった「未熟な存在としての子ども」観は、大人や社会が子どもを未熟な存在として捉えている子ども観である。このため、子どもは保護されるべき対象であると見なされることになり、子どもを育てる環境としての家庭環境が重視されるようになる。したがって「未熟な存在としての子ども」観と関連のある社会背景の1つとして離婚率（図1）が考えられる。図1で示しているのは、人口1,000人あたりで計算した普通離婚率であるが、戦後ほぼ一貫して上昇傾向している。また1995年の離婚率1.60は統計史上最高であるが、戦前と比較しても、特に高い割合であるとも思われない。

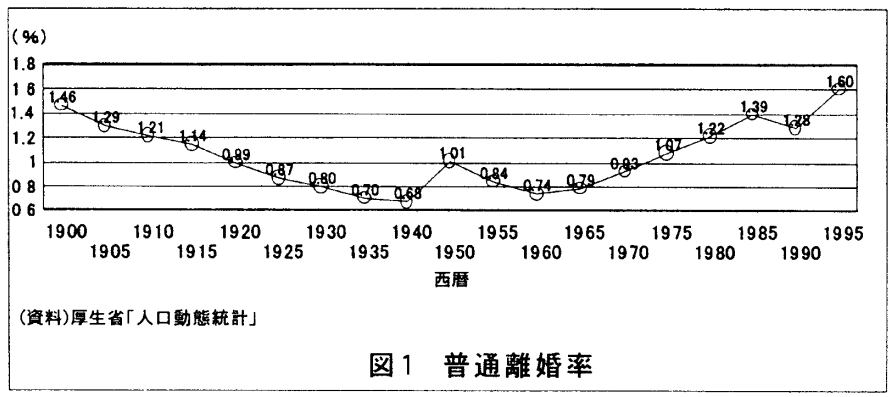


図1 普通離婚率

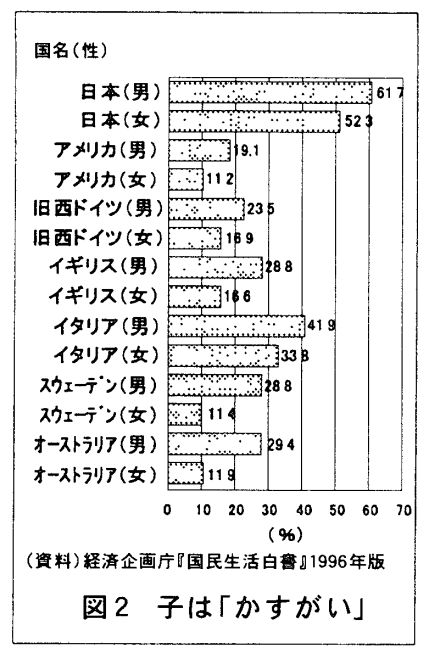


図2 子は「かすがい」

離婚の原因は実際のところ様々であろうが、離婚が抑制されているの一因として、日本社会では諸外国と比較すると「子はかすがい」と考える傾向が高く、「子供がいれば夫婦仲が悪くなっても別れるべきではない」との問いに、男性の61.7%、女性の52.3%が賛成しており、他国よりは高い割合になっている（図2）。また、子どもの有無による離婚観を見ても、子どもがいる夫婦の方が離婚に対して消極的である（図3）。尤も、「かすがい」意識は、若年層ほど低く、将来的には、離婚率の抑制要因となるかどうかは、今のところ定かではない。

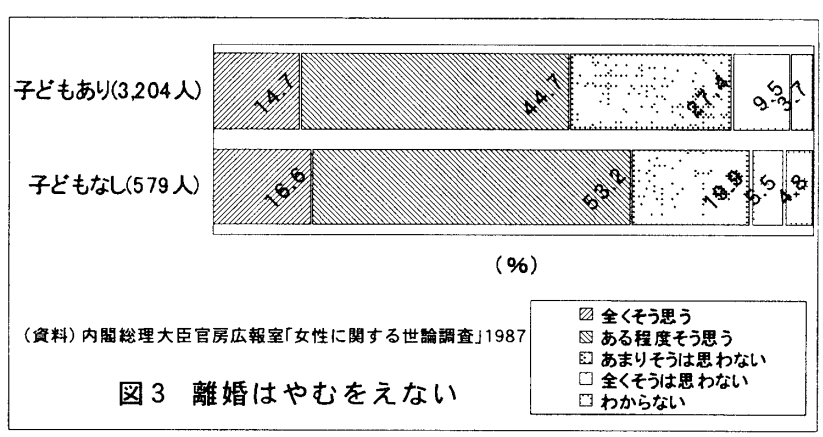


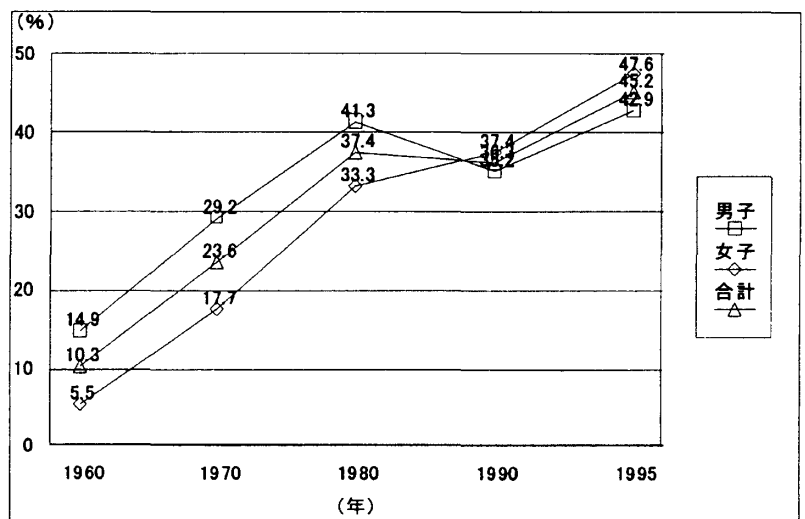
図3 離婚はやむをえない

前章の小説分析のなかで、子どもを夫婦のかすがいとしていたり、夫婦の絆と見なしている場面は、「愛情表現の対象としての子ども」にまとめた。この「愛

情表現の対象としての子ども」という子ども観は、先にも見た通り「未熟な存在としての子ども」観のなかのみならず、全体のなかでも最も多く抽出された子ども観であるが、同時に、「ゆらぎの場面」からも多く抽出されており、不安定な要素を多く含んでいた。戦後期における離婚率は著しく上昇しているわけではないが、上昇傾向にあることは先に指摘したとおりであるが、「未熟な存在としての子ども」観も離婚率の上昇と同様1960年代以降、徐々に不安定さを感じさせるようになってきている。したがって、離婚という夫婦の選択に対し、「未熟な存在としての子ども」観が規範として夫婦の態度決定に影響しているのではないかと考えられる。そのような関連が成り立つとすれば、逆に、離婚率の上昇により「未熟な存在としての子ども」観の方が問い直され、不安定な要素を抱え込むことになる様子もうかがわれる。

(2)「相対化された子ども」観とその社会背景

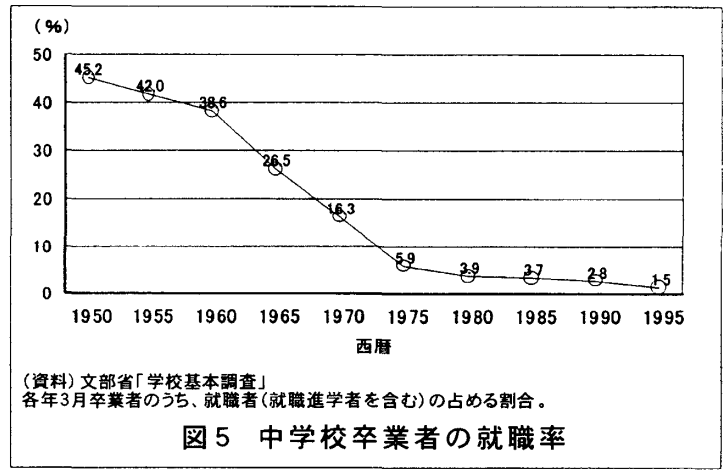
「相対化された子ども」観にカテゴライズされた2つの子ども観は、主に中等後教育機関との関連で子どもを捉えている。したがって、この子ども観と関連のある社会背景の1つとしては大学や短大、専修学校等への進学率上昇による子ども期の延長があると考えられる。延長された子ども期については、年齢的な特性により、子ども観研究ではなく青年観の研究として別に扱うこともできるであろうが、本研究では前に説明した通り青年期も視野に入れているので、ここでは子ども期として検討していく。



(資料)文部省「学校基本調査」
大学学部および短期大学本科入学者数(浪人を含む)を3年前の中学校卒業者数で除した比率。

図4 大学・短大への進学率の推移

図4は、大学・短大への進学率だが、戦後期における顕著な上昇傾向が見られる。こうした進学率の上昇期と「学歴社会のなかの子ども」という子ども観が前章の小説分析で抽出された時期が一致している。尤も、学歴社会を身近に意識させる受験競



(資料)文部省「学校基本調査」
各年3月卒業者のうち、就職者(就職進学者を含む)の占める割合。

図5 中学校卒業者の就職率

争の激しさは、戦前においても指摘されている。この点については、本研究が対象としている子ども観は、ベストセラー小説という大衆の意識を反映していると考えられるデータから抽出された子ども観が前提となっているので、問題の質が異なっているといえる。

図5は、中学校卒業者の就職率であるが、この低下も1960年代に顕著である。この就職率低下の大きな原因は、高等学校への進学率上昇にあると考えられる。

こうしてみると、受験競争自体は戦前からあったとしても、その前段階として高等学校への進学率の上昇が受験競争を一層身近なものとして感じさせ、学歴社会を意識させる手助けをしている様子がうかがえる。これによって、はじめて、社会に共有できる子ども観を構成する要素としての学歴社会が認識されるようになったと考えられる。そして、「学生としての子ども」が特別な存在でなくなると、前章で見たように1980年代以後、小説分析からも「学生としての子ども」が抽出されなくなっているので、ここでも関連が見られるといえる。

(3)「主体的存在としての子ども」観とその社会背景

前章までの分析で「主体的存在としての子ども」観は、あまり社会に浸透していない子ども観であることが明らかになった。このうち「権利の主体としての子ども」観と社会背景の関連については、子どもが権利の主体であるとする国際的な取り組みと、それに対する国内の取り組みが1つの有効な指標になると考えられる。表3は子どもに関する取り組みについて、簡単にまとめたものである。ここには子どもの人権を尊重し、子どもの権利を保証していく国際的な動向が見られる。しかし、既に日本の国内においては、ある程度の児童福祉が充実していることもあり、子どもの権利条約の批准に関していえば、1994年までかかり、結局、世界で158番目の批准国となった。これは国際的な趨勢とは、少々異なる。表2からも分かる通り「権利の主体としての子ども」は、前章の小説分析で、最も抽出数の少なかった子ども観なのである。

また、「有能な行為者としての子ども」観も、権利を主体的に行使する有能性という側面から検

子どもに関する取り組み（表3）

年	内容
1924	ジュネーブ児童権利宣言
1948	世界人権宣言
1951	児童憲章 内閣総理大臣主宰、児童憲章制定会議による。
1959	児童権利宣言 第14回国連総会にて採択。
1979	国際児童年 児童権利宣言採択、20周年記念。
1989	子どもの権利に関する条約 第44回国連総会にて採択。

討するならば、前章の小説分析でほとんど抽出されることがなかったように、一般的な意識として、あまり社会には浸透していない子ども観であるといえる。

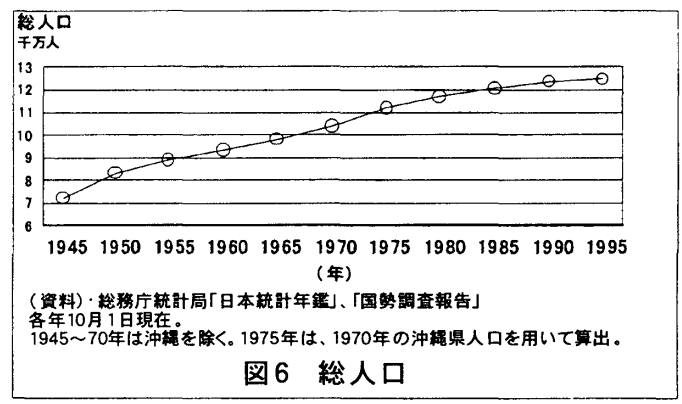
こうしてみると、子どもの権利条約の批准が遅かったことも、日本の社会が共有している子ども観と関連しているといえる。したがって、児童の権利や人権に関する世界的な取り組みと、日本社会における一般的な子ども観とは、大きな差がある状態を見て取れる。

こうした状況は、社会構造の変化に伴うものではなく、思想やイデオロギーによって子ども観という意識の変容を迫るものである。したがって、今後、普及が見られるかも知れないが、現在のところは、こうした取り組みと、戦後の日本社会における子ども観とのあいだには、あまり関連がないと考えられる。よって、小説分析からは、あまり「主体的な存在としての子ども」観が抽出されなかったのである。

(4) 戦後の日本社会における子ども観全体とその社会背景

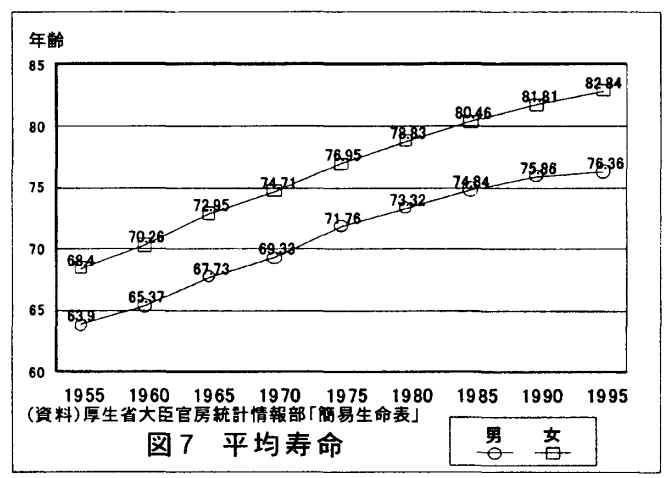
戦後期の日本社会における総人口は、一貫して増加傾向にある（図6）。この増加の大きな原因は、平均寿命の上昇（図7）によるものと考えられる。これは、総人口が増加する一方で、少子化が進行（図8, 9）していることからも明らかである。

このように、社会全体のなかで子どもの数が減少してくると、子どもに希少価値が生じてくる。少子化により子どもが希少価値を帯びてくる傾向を合計特殊出生率より、読みとるならば1970年頃から、その傾向が強まっていると考えられる。前章の小説分析の結果をまとめた表2を概観すると1970年頃を境に変化が見られることと一致している。そして、この傾向は、多くの子ども観に変化をもたらす要因となっていると考えられる。つまり、それまでイメージされていた子ども観を根本的に変化させる可能性を持った価値であるといえる。



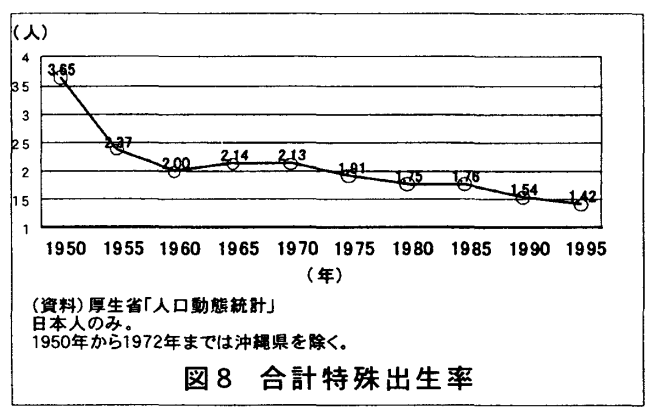
(資料)・総務庁統計局「日本統計年鑑」、「国勢調査報告」
各年10月1日現在。
1945～70年は沖縄を除く。1975年は、1970年の沖縄県人口を用いて算出。

図6 総人口



(資料)厚生省大臣官房統計情報部「簡易生命表」

図7 平均寿命



(資料)厚生省「人口動態統計」
日本人のみ。
1950年から1972年までは沖縄県を除く。

図8 合計特殊出生率

5. 結論

本研究は、戦後の日本社会における子どもを認識するための枠組みとして共有されている子どもについての平均的なイメージを、ベストセラー小説の分析により導き出し、そこで明らかになった具体的な子ども観の変容を、過去に実施された統計データ等を用いて社会背景と関連づけて検討したものである。その結果、ベストセラー小説の分析より明らかになった子ども観の変容は、それぞれの指標となった社会背景と関連づけて説明することができた。こうした関連は、逆にいえば、ベストセラー小説が、その当時の社会背景を反映した子どものイメージを取り込んでいることと、小説分析によってその当時の子ども観が抽出されたことを示している。

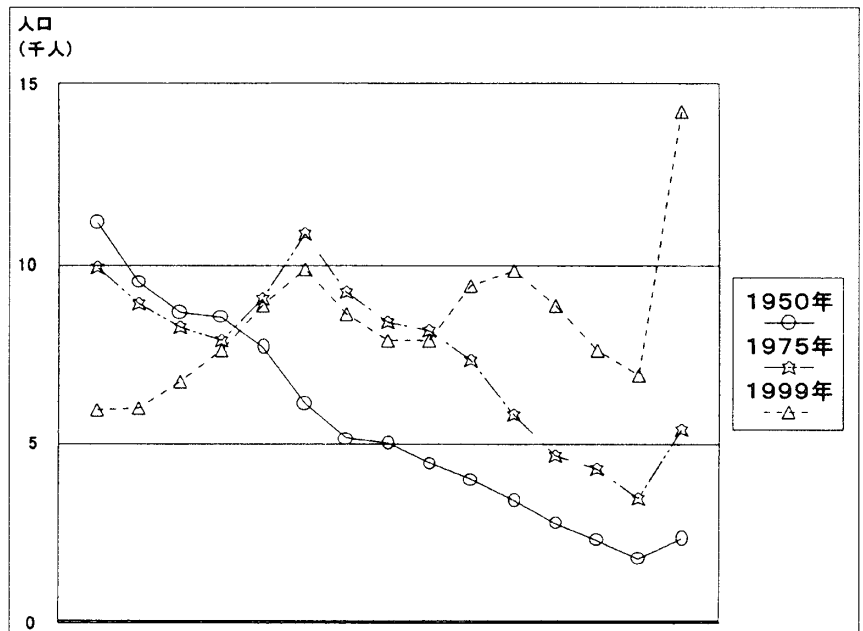


図9 年齢別人口

また、戦後の日本社会は大きく変化したが、子ども観自体については、あまり大きな変化が見られなかった。これは、社会に共有された一般的な子どものイメージというのが自明視されており常識であると考えられているために変化し難いといえる。このため子どもの実態と子どもを認識するための枠組みのずれをを補うために、新しい子ども観、つまり新しい子どもを認識するための枠組みが作り出されてきた。それが「相対化された子ども」観や「主体的存在としての子ども」観ということになる。

こうして従来から受け継がれてきた子ども観を変化させて、現在の子どもの認識の枠組みとするのではなく、新しい認識の枠組みとして、社会背景に対応した子ども観を新たに作り出し、従来の子ども観と併存させてきたことが、戦後の日本社会における子ども観変容の実際であるといえる。

<注>

（1） 戦後の子ども観が「変容」したという予断を持っているわけではない。これは、本研究が中田（1999a）を参照しているためである。

第1章

（２）　一般的に子ども観研究といえば、思想家や哲学者によって言明された理想的な子どもの在り方を指すことが多い。

（３）　アリエス（Ariès訳書　1980）の研究などが、その代表といえる。また、本研究のように戦後を対象とするものも、歴史的アプローチという側面を持つ。こうした、哲学的・思想的アプローチ、歴史的アプローチ、社会学的アプローチは理念的な区別であり、研究の実際としては相互に重なり合う側面がある。

（４）　山村・北沢（1992）は、教育社会学の領域における子ども観研究の少なさのを指摘している。また、片岡（1994）は、教育社会学の領域において価値研究が等閑視されてきたことを指摘している。つまり、経験科学である教育社会学の立場からは、子ども観研究が価値研究に見えたため、あまり関心を惹かなかったと考えられる。

（５）　こうした指摘は、山村（1983)、藤田（1991)、深谷（1996）の研究をはじめ、子どもの実態把握を試みている多くの先行研究が指摘するところでもある。

（６）　変容のみは、中田（1999a）である程度は明らかになっている。したがって、本研究では、引き続き、その変容にアプローチするとともに、その変容を引き起こした社会背景との関連を探っていくことになる。

第2章

（７）　この3つの方法は、坂本（1997、11-12頁）が家族イメージを捉える方法として、提示したものであるが、本研究が子ども観を捉える方法としても全く有効である。

（８）　このようなとらえ方は、山村（1971）や瀬戸（1993）も指摘するところである。

（９）　例えば、時代小説・SF小説・翻訳小説・私小説などは、その当時の世相を直接的に反映していると見なすことはできない。したがって、本研究では、これらの小説を分析対象より除外した。

(10)　売り上げ部数を判断の基準としないのは、1946年の終戦直後と現在では、あまりにも出版事情が異なるためである。当然のことながら、紙という物資確保の容易さ、売れ筋情報の収集など、近年の方が部数を伸ばしやすい環境にある。なお、『出版年鑑』は1950年までは、順位が明記されていないので、それ以前の順位は『出版指標・年報　1996年版』(1996)を参照した。

(11)　各小説のベストセラー年と、その間隔は表2参照。

(12)　実際の分析に用いた本の版・刷は、次の通りである。『斜陽』文庫版94刷、『君の名は（下)』新装版第1刷、『太陽の季節』文庫版37刷、『挽歌』31版、『砂の器』226版、『氷点』38刷、『赤頭巾ちゃん気をつけて』文庫版24版、『恍惚の人』44刷、『限りなく透明に近いブルー』第10刷、『四季・奈津子（上)』文庫版第20刷、『四季・奈津子（下)』文庫版第22刷、『愛のごとく（上・下)』1刷、『化身（上)』4刷、『化身（下)』7刷、『ノルウェイの森（上・下)』2刷、『TUGUMI』13版、『パラサイト・イヴ』7版、『失楽園（上)』第10刷、『失楽園（下)』

第6刷。なお、表2において示されている年は、各小説の売り上げ部数が高順位を記録した年であり、各小説の出版年ではない。

第3章

(13) このような分析を行った場合、同一の子ども観が同一の小説から何度も抽出される場合があり、その頻度は小説の主題やストーリーによって大きく異なる。しかし、1つの小説からの抽出回数だけで、社会において該当する子ども観が強く支持されているものかどうかを論じることはできない。このため子ども観が社会において、どの程度支持されているのかは、同一の種類の子ども観が抽出された場面数ではなく、分析対象となった小説数を基準にした。したがって、同一の小説より1回以上抽出された子ども観は同じように扱うことにした。

(14) 「子どものように」といった類の比喩は、すでに人口に膾炙した表現であり、例えばそれが純粋な行い、無垢な様子、聞き分けのない態度など、その指し示す内容が容易に推測できるためである。また、単なる情景の記述として子どもを指し示す言葉が用いられる場面からは、子ども観を読みとることができないので、その様な場面も除外した。

(15) 紙面の都合上、小説分析の具体例は省略する。なお、小説分析の具体例は中田（1999a, 1999b）を参照されたい。

参 考 文 献

Ariès, Philippe　1960, 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』みすず書房　1980。

藤田英典　1991,『子ども・学校・社会』東京大学出版会。

深谷昌志　1996,『子どもの生活史』黎明書房。

林　雅代　1995,「近代日本の『青少年観』に関する一考察」『教育社会学研究』第56集、65-80頁。

片岡徳雄　1994,「第一章　人間形成としての文芸　一　はじめに－制度研究から価値研究へ」片岡徳雄編『文芸の教育社会学』11-12頁、福村出版社。

中田周作　1999a,「戦後日本における子ども観の研究」『子ども社会研究』第5巻、56-68頁。

――――　1999b,「現代ベストセラー小説における子ども観の研究」『九州教育学会研究紀要』第26巻、85-91頁。

坂本佳鶴恵　1997,『〈家族〉イメージの誕生』新曜社。

瀬戸知也　1993,「教室の生活とヴァルネラビリティ」木原孝博・武藤孝典・熊谷一乗・藤田英典編『学校文化の社会学』138-157頁、福村出版社。

出版ニュース社　1996,『出版年鑑』。

徳岡秀雄　1984,「米国における少年司法政策の動向と子供観・人間観の変化」『教育社会学研究』第39集、18-31頁。

———— 1993,『少年司法政策の社会学』東京大学出版会。
山村賢明 1970,「現代日本の子ども観」佐藤忠男・山村賢明編『児童の理解 第一巻 現代社会と子ども』23-56頁、東洋館出版社。
———— 1971,『日本人と母』東洋館出版。
———— 1983,『かわいくない子どもたち』広池学園出版部。
———— 1986, "The Child in Japanese Society", in H.Strvenson et al(eds.),*Child Development and Education in Japan.*, W.H.Freeman and Company,pp.28-38.
————・北沢毅 1992,「子ども・青年研究の展開」『教育社会学研究』第50集、30-48頁。
全国出版協会出版科学研究所 1996,『出版指標・年報 1996年版』。

A Study on the View of Japanese Childhood

Analysis of the Best Seller Novels and the Social Background

NAKADA Shusaku

The aim of this paper is to examine the view of childhood in Postwar Japan. In this paper, I use the word "the view of childhood" not in the sense of thought about childhood but of Japanese general image about childhood. The concept can be defined as adult-child relation.

First, I analyze sixteen Best Seller Novels in Postwar Japan, which were published between 1946 and 1999. In this way, I use two approaches: the kind of the view of childhood and the feeling of Novels' characters. The findings of this analysis show three types of the view of Japanese childhood. The first is the view of childhood as the immaturer being than adult. The second is the view of childhood as the relativization of adult-child relation. The third is the view of childhood as subject being like adult.

Secondly, I analyze the social background in Postwar Japan, which were relate to three types of the view of Japanese Childhood. There is, for example, the relation between the divorce rate and childhood as the immaturer being than adult, the relation between the ratio of students who enter higher education and the childhood as the relativization of adult-child relation, the relation between the trend of child's right and the view of childhood as subject being like adult, the relation between the total fertility rate and the whole view of childhood in Postwar Japan.

In conclusion, (1) In Postwar Japan, the whole view of childhood change a little. (2) The change of social background in Postwar Japan creates the new types of the view of childhood. (3) These types of the view of childhood are coexistent.